

# 心が開かれるとき

## — あるクラスでの出会いから

西 隆太郎

(大学教員)

ガラス戸の向こうから私を見つけてくれたA君に手を引かれ、一、二歳児のクラスに入った。Bちゃんが私に飛びついて甘えると、Bちゃんと仲良しのCちゃんもやって来てくれた。Cちゃんは私が前回このクラスから帰るとき、「もう来ないで」と言っていたから、そのことはずつと気にかかっていたところだった。私のかかわり方がよくなかったのかなとも、一緒に遊んでいたのに急に帰ることになったのが嫌だったのかなとも思っていた。

\* \* \*

Cちゃんは私と両手をつないで反つくり返り、ブリッジのように頭のでっぺんを床につける遊びを何度もする。ごつんとぶつからないうような私を気をつけているのだが、勢いよくぶつかりそうなくらいが、かえってCちゃんには面白いらしい。ぶつかりそうなスリルだけでなく、やりとりを楽しみたいという気持ちもあって、私がつないだ手をぶるんぶるんすると、Cちゃんは少し笑う。Cちゃんのそんな笑顔は初めて見た気がして、こんなふうには笑うんだ、と思う。そのうち、私の腕や肩を手でつかんで頬張り始めたので、私もうれ

しくなって、Cちゃんの膨らんだほっぺたを指で「ぷっ」とする。

そのうちCちゃんは、半透明の布を頭からかぶり、「おぼけー！」とやって来て、「ばあ」と布を取る。「あ、おぼけかと思ったらCちゃんだった！」と喜ぶと、何度も繰り返し、おぼけの「いないいないばあ」をして遊ぶ。その面白さが周りの子どもたちにも広がったように、みんながいろんな色のおぼけとなつて

私の所にやって来てくれた。



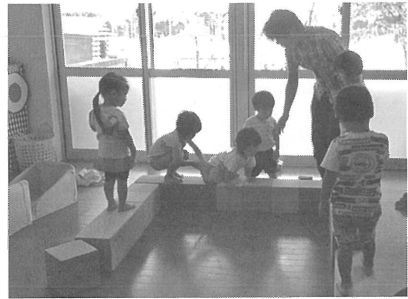
好きな色の布を引つ張りあつてい  
るうちに、少し転  
んでしまった子も  
いた。Cちゃんは  
その子の膝に寄っ

て、「大丈夫？」と声をかけている。他にもCちゃんは、先生の動きを察して、ペランダに出してしまった子を呼び戻そうと声をかけたりしていた。

これまでは、体をおついたり転んだりする危なっかしい遊びが印象的だったのだが、Cちゃんはこんなふうに誰かを思いやったり、周りのみんなのことを考えてくれていたのだと気づく。今日は私にも、背中に布を掛けてさすってくれたり、その布を洗濯物のように、まめまめしく干してくれたりさえした。

このごろは言葉も増えてきたから、こんな優しさも見てとれるが、それはずっとCちゃんの中にあつたものだろう。私はこれまで、どれだけ気づけてきただろうかと思う。

Cちゃんの求めに応じて抱っこしていると他の子どもたちもしてほしくなるので、忙し



く抱っこしながら、少し高い所にある飾り棚のお花やクマさんを一緒に見ていた。どの子も私に、「ママ」「パパ」と呼びかけてくれる。ちょうど食事の時間が近づ

き、私も帰ることにした。「そろそろ帰るね」と言うのと、Cちゃんのほうから「また一緒に遊ぼうね」と言ってくれた。膝の上でくるCちゃんを「ありがとう」と言って抱きしめ、みんなに手を振ってもらって別れた。

これまでこのクラスを訪れたときは、求められて抱っこしても、よじ登ってじゃれるような遊びになることが多かったが、今日は私自身、どの子のことも、ずっと自然に抱きしめられる気がした。

\* \* \*

何年保育園に通っていても、「心から」その子とつきあうことが、どれだけできていただろうか。この日は、「子どもが求める範囲で」といった枠を超えて、自分自身の気持ちで、その子たちを大事にしようと思えた気がする。気を張ってというよりは、今まで以上に自然と気持ちを通じあえた気がする。

ママやパパとの体験が思い浮かぶような自然なかかわりは、「保育者の専門性」とは異なるものと考える人もあるかもしれない。しかし、一、二歳のあどけない子どもたちは、そんな接し方を求めても当然なのではないだろうか。保育の専門性と呼ばれるものも、その基盤は、子どもたちと心通じあう、ありのままの人間としての体験にあるのであって、こうした人間的基盤を排除して専門性をつくり上げるわけにはいかないように思う。

心を開いて子どもたちと出会うとはどんなことか……それは、自分自身の体験を通じて、また自分自身のとらわれを超えて、体感し、深めていくべきことのように思う。

子どもたちも、私たちに最初から心開くことができずには限らない。最初は危なっかしいような遊びから始まって、いつしか子どもたちのほうから私に心を開いてくれた。心開かれるとは、どちらか一方だけでなく、互いの心が通じあって進む過程なのだろう。

みんなの「いないいないばあ」が始まると、どの子の「ばあ」も見えてあげたくて、忙しくなる。子どもたちに「見てほしい人」と思ってもらえることは、とてもうれしいことだと思う。

ある日は「もう来ないで」、別の日は「また遊ぼうね」と言う。そのことも、日にちをか

けた「いないいないばあ」のようなものだったのかもしれない。

その時、その場ではつかめないもの、一つのエピソードを見ただけではわからないものが、つきあっていくうちにわかることがある。出会うたび、子どもたちと私の関係も変わっていく。

雨の日もあれば晴れの日もあるように、子どもが私に向けてくれる気持ちも、そのときどきによって色合いを変えるだろう。それでも、今日のように出会えたこと、これまで互いにかかわってきた時間が、これからの過程に生かされていくことと思う。